特選

輪の中へ

古沢町
真野　美栄子

おだやかな昼下り
アルツハイマー症と言われて久しい
ちーちゃんの車椅子を押し
散歩に出た

少しずつ　赤ちゃんにもどってゆく
幼なじみのちーちゃん
話しかけるばかりの　もどかしさ
歩みを止めて　深呼吸

その時
鳶が　気持ち良さそうに
ピー　ヒョロロロ〜
ちーちゃん　ゆっくり頭を反らし
にっこり笑ってる

小学生の頃　鳶が鳴くと
必らず二人　大声で合唱した歌
♬とんびが　くるりと
輪を描いた
ホーイのホイ♪
まさにその歌を
彼女が　か細い声ながら
確かなメロディ　歌詞で唄ってる
思わず　横に寄り添い
手をにぎり　二人で唄う

知らぬうちに　涙あふれて…
ふと　ちーちゃんが
姉のような目差しで　見つめ
やわらかな　指先で
そおっと　頬をぬぐってくれた

あったかな　日だまり
二人の上で
ゆったり　輪を描きながら
ピー　ヒョロロ〜

（評）日常の平凡な哀しみと優しさを描いて詩にすることは簡単に見えて、おもいのほか難しい。言葉の抑制と過剰の調節に作為を感じさせず、自然な感性で表現されているのは作者の人柄の反映のように思える。

特選

出産ゲーム

東近江市
辰巳　友佳子

私は運転手ですが勝手に脇道にそれることはできません。誰かが回すルーレットの数字の数だけ進むことができます。「結婚する　御祝い金＄一〇〇ずつもらう」赤いバラで飾り付けられた白い車に助手席には夫と名乗る人を乗せて進まなければなりません。「排卵誘発剤の注射代＄二〇〇支払う　一回休み」私の意志とは別に注射を打たれます。「双子が誕生　御祝い金＄一〇〇ずつもらう」私そっくりな子供が後部座席に座っています。「排卵誘発剤の経口薬代＄二五〇支払う　六コマ進む」四時間ごとに薬を飲まなければなりません。「五つ子が誕生　御祝い金＄一〇〇ずつもらう　八コマ進む」後部座席はいっぱいで折り重なっています。「七つ子が誕生…」車のルーフにも子供で溢れかえっています。私は泣きながらアクセルを踏むのです。早くゴールしてこの出産ゲームを終わらさなければなりません。ルーレットが回っている最中にこっそり進みます。子供たちは自由になりたい一心で、口々に夫を罵り始めます。夫は怒って車から降りてしまいました。これで産まなくてもよいと高を括っていた私がバカでした。ゴールでゴヤの絵のサトゥルヌスと化した夫が両手を広げて待ち構えているのでした。

（評）新しい生命が誕生するという神秘を、私たちは科学の発展と共に人工的に操作するようになった。そのことを、現代への警告を含めた寓話的な書き方で、巧みに展開している。ただ、ゴヤの絵を知らなければ、最終の底知れぬ恐ろしさは伝わり難いかもしれない。

入選

あの夜わたしは

日夏町
寺村　滋

十メートルの津波が町を襲った
住職で市役所の課長であった私は
災害対策本部で　自ら夜の遺体安置所付を
かって出た

次々と遺体が運ばれてくる
百余体の凄惨な遺体と対面する
苦痛にゆがんだ無念の形相
元気な私が何故、それぞれの悔しい気持が
覚悟のない死がそこに集まる

幼い女の子　白髪のお爺　元気だった青年
徹夜の警備で百余の棺とともに居る
死者の顔が浮んで霊が立ちあがるように思える

翌日遺体に逢いに遺族達が続々やって来る
「見つかってよかった　うちのやつです」
ぼろぼろと泣きながら棺にすがる夫
検死の終った棺を運び出す人達に立合う

次々と棺を運ぶ業務の流れが私を深刻さから
呆然へと変身させる

棺が物となり　P85と整理番号になる
はっと我に返ると
成仏できない　成仏できない　と声がする

こんな私を私はどうしたらよいのだ
もう　経を読むしかない。

こんなにもたくさんの死はすぐ隣にあった

（評）大津波に襲われた町の遺体安置所の様子を、一行ずつ丁寧に描いていくことで、非常に臨場感のある作品に仕上がっている。死の残酷さと、その場に向き合った作者の無力感に胸を衝かれる。

入選

菜花

正法寺町
髙井　豊

菜の花は山裾を染めていた

曲がった胡瓜
虫食い痕もある野菜が
手造りの木台に置かれている

蕗のとう
菜花
タラの芽など

茹でたばかりの菜花を
小皿にのせて
妻は
食べてみよ　と合図した
噛めば　ほのかに甘い

取立ての野菜のあまみ　など
都会育ちの私は
知らなかった

あまい　というけれど
罪深いことなのだ
荒地に芽生え
雨風に打たれながら
花まで開き
結実にと蓄えたものを
横取りして　しまったのだから―。

（評）余分な言葉や力を入れ過ぎずに、ほのぼのとした簡潔な書き方で春の野菜群が紹介されていく。そしてつい見過ごしてしまいがちな私たち人間の傲慢さを振り返らせてくれる。もう少し膨らみや揺れが欲しいとも感じるが。

入選

初春

西今町
花井守人

初春(はる)の湖(うみ)
うたかたの
澱みを出でて
波の上に竿をさす笹の舟

旅立ちの積荷は一つ
日々是好日

（評）自由律の短歌かなと思うほどの短い詩である。短さゆえに、読みながら一つ一つの言葉の持つ力をより広やかに感じることができ、六行の中から色彩鮮やかな春の情景と人間が、美しく深く浮かび上がってくる。

入選

天使のほほえみ

西今町
松本トシ子

生まれた日から強い黄疸
初乳　母乳はダメといわれ
ブドウ糖と人工乳をのませた
黄疸は十日程でひいて
母乳を含ませるが
吸う力が弱く　お腹をすかせ
眠れずに　泣いている

何日か経ち　育児に疲れ
じっと赤ちゃんを見ていた

目をほそめ　笑みを浮かべている
何度も　なんども　笑みを浮かべ
語りかけるように　かわいい…

心が　身のまわりが
ふぁ～と　あたたかくなり
育児の疲れも忘れていた

これが「天使のほほえみ」と
その　ほほえみに　あえた喜び
私の一生の宝物となる

あの　ほほえみから三年
「難病疾患」と知らされた

徐々に萎える筋力
年々にできなくなる事がふえる

しかし　子の心は　自由で明るい
やさしさと　思いやりで周りを癒す

全面介護の中　夢をもち
出来ることを精一杯に
命をかがやかせ生きた二五年間

私の心に愛のほほえみ
家族の絆の天使のほほえみ

（評）子どもを育てるという長い営みを支えるものは何だろう。初めて無心なほほえみに出会った作者の内から自然に湧き上がってきた喜びは、健気で強く美しい。世の物差しで測りきれない部分を見つめながら、詩人は生きていく。

入選

さんもんのとく

西今町
やまかみ まさよ

よいことがおきそうな
けはいのする　けさのめざめ

ちいさなことりは　まだ
のきしたのこえだに　きてはいない
あけのみょうじょう　と
ありあけのみかづきがのこっている

いつもの　はきなれたくつで
はくもくれんのたたずむ
おもてどおりにでる
まいあさ　おんなじひととの
すれちがいに　かすかにもくれいを

ときおりなくのは　あけがらす
あさはやくから　なにかを
しらせにやってくるのは
えんぎがわるいと　しってのことか

しらしらとあけてゆく
まばたきほどのあさひを　てのひらにうけ
あかい　はしのらんかんに　せもたれ
わたしもまねて　ないてみようか
――ハヤオキ　サンリョウ　ケンヤク　ゴリョウ……

あめがふっても　ひとりきりでも
ここにきて　ないてみよ

（評）ひらがなで書かれると、感性がやわらかさに包まれて差し出される効果がある。早朝の何気ない風景描写から、最終連での鳥への呼びかけの二行が作者の心情を重奏するように届いてくる。

佳作

心の洗濯

岡町
宮地正子

佳作

クローバーの思いで

芹橋一丁目
楠亀美恵子

佳作

ごめんなさい

馬場二丁目
清水はる

《総評》

それぞれの置かれている場所で、日々の生活の中から少し視線を遠くに向けて「人生」をも合わせて視つめてみる。そんな時に詩が生まれてくるように感じています。

年々その感を深くしていますが、応募してくださった作品は本当に優劣を付け難く、今年度も特選と入選、入選と佳作の間に、ほとんど差がなかったというのが正直な感想です。どの作品も丁寧にしっかりした内容でまとめられていて、またどの作品にも、ここがもう少し物足りないという部分がありました。

最初はちょっとした思いつきのように始まっても、詩を書きながら考え、また考え、そうやって少しずつ進めていく過程があり、そして自分にとって宝物のような詩の小宇宙・ポエムができあがっていくのです。その宇宙が深い真実のポエジーを帯びているようであって欲しいと願っています。来年も変わらずご応募くださいますように。

尾崎与里子

選者詩

カンナ　真紅の

石内秀典

降り立ったのは
私一人だった

海辺を走る
単線の鉄道の駅を
熱の風は吹きぬけ
プラットホームの
真紅のカンナが
幅広の緑の葉の間から
燃え上るように立った

男の葬儀は
静かに終わり
ぼうぼうと立つ陽炎の道へ
霊柩車は消えた

記憶は
モザイク状に蓄えられる
そのわずかなスペースに
一つの記憶が残るために
一つの記憶が殺されねばならない

燃え上がる
真っ赤なカンナの部屋
そこを通り過ぎて行った
一つの記憶

遠く
かすかに海が揺れ
海とともに
時間は
蒸発していった

柑橘の朝

尾崎　与里子

ゆれている心を
人のかたちのままで運んでいると
初夏の柑橘類が擦過するような
朝のひかりがほとばしる
ヒリヒリする飛沫に
まとわれながら
隣家の庭先で話している
誰かの声の抑揚を美しいと思い
遠くの山で充満する緑が
一瞬　透きとおるのが視える

小さな広告欄から
淋しい死亡欄へと
わたしは今日もあなたを探して
大切なものは胚胎されたまま
あなたのただたどしさと弱さ
淡い傷口から
たえず滲みだしている悔恨
存在の持っている生きる意味
をゆっくり辿っていく

また聞こえてくる
誰かの声の抑揚を美しいと思い
遠くの山で充満する緑が
透きとおる

風

山本　英子

宛名だけの絵ハガキが届く
八月の焦げる日に

描かれているのは
旋律
たった一両で走る電車に
たった一人　乳飲み子が乗っていく

八月の裂ける日
差出人のない絵ハガキが届く

描かれているのは
怒り
赤いハイヒールが
鉄より熱い車椅子を押していく

八月の絞首台
誰も殺さなかった人が揺れる日
絵ハガキが届く
裏を返せば

風